

〈プロローグ〉 木瓜の花が咲いた<sup>ほけ</sup>

中村龍介

マンションの七階にある我が家のベランダには、植木鉢やプランターがたくさん並んでいるが、土だけが残って雑草の生えているもの、半分枯れたようなアロエの木、大きな鉢に枯れた幹だけが残っている幸せの木等々、ガラクタと思しきものが殆どだ。ぞの中で、唯一、春には、ピンク色の美しい花を咲かせる木瓜の鉢植えがある。樹齢二十年近くにもなる木瓜だが、亡き妻との因縁が深い。

一九九三年一月、妻は、赴任先の米国・ミシガンで突然、脳出血に見舞われ、雪の上に倒れた。八時間に及ぶ大手術で一命は取り留めたものの、後遺症として右半身麻痺と失語症が残った。妻の他に中学三年の末娘も帯同しての赴任だったので、家事は私の仕事になった。「三K生活」(会社、家事、介護)の始まりである。

頑張り屋の妻は、懸命のリハビリのお蔭で何とか、車椅子での生活が出来るまでに回復した。幸い、アメリカは身障者への配慮が行き届いており、スーパーや遊園地のパークングでは、身障者用コーナーが最前列に設けられていたり、また、デイズニーランドなどの娯楽施設では、待たずに済むよう、一般客とは別の入り口が作られていたりで、外向的な妻は、アメリカでの生活をエンジョイしていたようだ。

四年後、日本に帰任した我々は、東京・大田区の南雪谷に居を構えた。

そして、数年後。ある年の春先、私は妻を車椅子に乗せて、近くの商店街を散歩していた。とある花屋の店先で妻が何か叫んだ。色鮮やかに並べられた紅梅、白梅の鉢植えの奥で、ひっそりと咲いている小さな花を左手で指差している。

ホンの十センチほどの木瓜の木だが、たくさんのツボミをつけ、開花したものが数輪ある。梅とは異なる淡いピンクの花弁から、妻は大好きな桜を連想したようだ。

早速買い求めてリビングの陽の当たるテーブルに飾った。部屋の暖房が効いたのか、小さな木は直ぐに満開。毎朝水をやるのが妻の楽しみとなった。

が、数日後、妻は脳出血の再発から入院してしまい、五年余りの闘病の末に他界。再びその花を見ることはなかった。

リビングに残された鉢植えはどんどん成長し、毎春可憐なピンクの花を咲かせた。十三年前、多摩川べりにある今のマンションに転居した際、大きめの鉢に植え替えて、陽当たりの良いベランダに置いた。

ところが、その翌年マンションの大規模修繕があり、十点ほどの鉢植えをすべて、ベランダから撤去することになり、置き場所に窮して、止む無く納戸に押し込めた。



← 12年後



悲しいかな、陽の当たらない納戸の中で植木は次々に枯れ始めた。木瓜も例外ではなかった。この木だけは元気になってほしいと、細い枝を大胆に切り落としてリビングの窓際に移した。とはいえ、ビル全体がメッシュと呼ばれる薄い布でスッポリと覆われていて、殆ど陽光はない。半ば諦めていた。

ある日、枯れ枝の先に緑色のゴミ粒のような、小さな芽らしきものがあるのに気がついた。ひよつとすると生き返るかもしれない。微かな希望が湧いてきた。

数日後、小さなゴミ粒は双葉へと育った。嬉しかった。せつせと手入れに励んだ。やがて、次々と葉が出て、ビルの修繕が終わった頃には木瓜は完全に復活した。

しかし、次の年の春を迎えても花は咲かなかった。暖かな陽を受けたベランダで、木瓜は青々と若葉を茂らせていた。焦ることはない。来年には咲くかもしれない。気長に待つことにした。

毎年、定期的に油粕の肥料をやって、花の咲くのを待った。木は随分大きくなったが、数えるほどしか花を付けなかった。以前咲いていたような、こぼれ落ちるほどの花を枝一杯につけた木瓜の木をイメージして、手入れを続けた。

すると、数年前から花の数が少しずつ増えてきた。そして、今年、春先に、樹齢二十年近い老木がたくさんの蕾を付けているのを見て、開花が楽しみだった。

四月に入ると、蕾が次々に開き始め、妻の十三回目の命日、四月四日に、たくさんの花が一斉に開いた。まるで、妻との再会を喜ぶかのように誇らしげに開いたのだ。早速、木瓜の鉢をリビングの窓に移した。

その日は日曜日だったので、オーストラリア在住の長女を除く三人の娘とその家族を含め七人が一堂に会して、和室の仏壇の前で簡単な法要の後、リビングでスキヤキパーティをもった。木瓜の花はスキヤキの様子を優しく眺めながら、笑顔で皆に挨拶しているように見えた。

【二〇二二年五月記 原稿用紙五枚（写真を除く） 課題「花」】

## 〈エピソード〉木瓜の木が枯れた

中村 龍介

私の暮らすマンションでは、十年〜十五年に一度、大規模修繕がある。十四年前、此処に転居してきて、二年目に大規模修繕があった。そして、今年の四月に二度目の大規模修繕が始まった。前回の大規模修繕で、最も気を遣ったのが、ベランダに出してあった鉢植えの植物だった。大修繕では、ベランダもその対象なので、ベランダに出してあるものはすべて、取り込んでおく必要がある。

中でも木瓜の鉢植えは、前回、日当たり不良で危うく枯れてしまうところを何とか蘇生させた経験がある。今回も前回と同じ納戸に鉢植えを収納したが、鉢植えを陽に当てる時には、木瓜を最優先で扱った。

七月の末、ベランダの修繕が終わった。早速、納戸の鉢植えを、すべてベランダに戻した。が、残念ながら木瓜は枯れてしまったようだ。

さて、次なる課題は、枯れてしまったように見える鉢植えをどうするかだ。一見したところでは、枯れ木となった木瓜を再生するのは至難の業というか、不可能そのもののように思える。

一旦は、再生を断念して鉢ごと処分すると決めたが、ふと耳を傾けると、上の方から亡き妻の叫び声が聞こえるような気がした。

「私の木瓜の花を枯らさないで！」

そうだ、この鉢植えは妻のものなのだ。私は考えを換えた。

ダメ元で来年の春まで、根腐れを起こさない範囲で、毎朝、水を与えてみよう。爾来、木瓜に水やりは毎朝の私のルーティンになった。



Before



After